

スウェーデンにおける労働者の生涯学習プロジェクト

ウラ・ヨハンソン
横山悦生・丸井美穂子 訳

生涯学習は、スウェーデンや他の国々で頻繁に使われるかなり新しい概念である。政治家や研究者は生涯学習について議論し、いまや生涯学習は国家が介入する場となった。しかし、それはまったく新しい現象ではない。人々は、ゆりかごから墓場まで生活しているかぎり、常に学習者であった。わたしたちは学校においてだけでなく、労働生活においても余暇時間においても、そして家族の一員としても新しいことを学習する。わたしたちは新聞から、テレビからも学習し、人と話をするだけでも学習する。人間であることは学習者でもある。

ある学習プロセスの目的は、労働者としてより技能を高めることである。労働生活の諸条件が急速に変化しているため、労働者の知識と技能はたえず更新されなければならない。これが生涯学習の一つの重要な要素である。しかし、他の意味づけも生涯学習と関連している。例えば、学習のために学習する。単におもしろいから学習する—このことも生涯学習である。小説を読むことは必ずしも労働者としてより技能を高めることではないかもしれないが、わたしたちは自分自身や社会をよりよく理解することができる。この学習プロセスはまた人生全体を通して続いていく。

本を読むこと、テレビをみること等は、わたしたちが自分でできる活動である。スウェーデンにおいては、一方でコレクティブなプロジェクトもまた存在した。すなわち、成人が本を読み議論をするために集まり、多彩なテーマを学習するために集まってきた。20世紀初頭、労働運動は学習集団、いわゆる学習サークルを組織しはじめた。そして、1912年に労働者教育協会（WEA）が設立された（Gustavsson, 1992）。労働者自身によって組織された自発的な生涯学習プロジェクトが本稿の主題である。わたしはこの分野における実証的な研究をおこなっていないので、本稿は主に二次的な資料にもとづいていることを銘記しておく。

労働者教育協会の教育的理念

19世紀末の世紀転換期に、平均的な労働者は数年間だけ初等学校に通い、基礎的な技能だけを学んでいたが、その時期に教育は社会と個人にとってより重要なものとみなされはじめた（Johansson&Florin, 1992）。成人労働者を教育するために国家による措置がとられ、いくつかの啓蒙運動が中流階級の人々によっておこなわれた（Frägsmyr; 1991）。労働運動の代表者たちはまたさまざまな教育プロジェクトに携わり、WEAの設立は生涯学習が労働者自身にとって重要となったことを示した。しかしながら、さまざまな教育思想がWEAの方針に影響を与えた。たとえばグスタフソン（1991）によると、WEAの初期の指導者たちには市民性教育を向上させようとする人物や、自己教育の思想を強調する人物が存在した。一方で、新人文主義や新古典主義の思想を主張する人物も存在した。1945年から1970年間のWEAの方針については、Ginner（1988）が市民性教育が徐々に衰退する間も新古典主義の思想が存続したと結論づけている。次にわたしはWEAの政策を特徴づける2つの主な目標をより詳細に説明しておく。

市民性教育

20世紀初期には、工業労働者は言葉の厳密な意味において市民ではなかった。かれらは国会議員を選出するための投票権がなく、かれらの声をあげることは困難であった。彼らの労働条件は悪く、彼らの多くの社会的経済的状況は貧困であった（Hirdman, 1983）。通常は、雇用主が専制的な方法によってその企業を支配した。

それゆえ過酷な生活に対する闘争が始まった。この点では、労働運動の形成は重要であった。というのは、集団としての労働者は容易には無視されないからである。労働者はまた政治に参加する権利を要求した。しかしその目的のためには、かれらは社会とその組織、社会的経済的及び政治的生活を統治する法律を学ばねばならなかった。かれらがそれらに無知である限り、かれらは意思決定過程に参加する権利を要求できなかった。このようにして、いくつかの学習サークルがそのような問題をとりあげた。さらに、参加者はフォーマルな会議においていかにふるまうか、議長や幹事としてどのように行動するか、社会的な問題を討議する方法について精通するように

なった。このようにして、かれらは雇用主との交渉においてと同様に政治において使用することができる言語の技能を獲得した(Ambjörnsson, 1998)。

支配階級の人々は労働者を文明化されていない人間とみなした。かれらは労働者を汚く、怠惰で、大酒飲みの人間であるとみなした。それゆえ、労働者は尊敬に値しない存在であった。以上から、市民性教育の目的は、清潔、勤勉、節度といった美德を向上させることによって労働者の評価を改善することにおかれた。これらの美德は雇用主によって敬意を払われる存在となるために必要であるとみなされた(同、前掲書)。わたしの見解ではこれもまた市民性教育の一側面であった。

Ginner(1988)によると、教育的理念としての市民性(citizenship)は以下のように特徴づけられる。

- ・ 人間的理性、合理性、社会の進歩への信頼。自然科学や教育はすべての市民や労働者の生活条件を改善させる重要な手段とみなされた。
- ・ 功利主義的な発想：その理想は可能な限り多くの人々の生活の実用的な価値を最大にすることにあつた。そのような考え方は、Jeremy Benthamの考え方と類似していた。
- ・ 行動的な市民であることの重要性：誰もが政治生活に参加するべきである。

しかし、工業的労働とその技術的な条件は、その教育内容に含まれていなかった。それにかわって、労働者の教育は工業的労働のための代償とみなされた。

新古典主義的教育理念

このようにして市民性教育の目標は、実用的であり、プラグマチックであった。すなわち、知識は労働者の経済的条件を改善するような目標を達成するための手段であった。科学と技術への態度は友好的であった。しかしながらこの理念はあまりに物質主義的で狭すぎるという理由で新古典主義的理念に固執する人たちによって批判された。それにかわって、教育は人間とその個性を発達させなければならない。知識はそれ自体が目的であり、他の目的のための手段ではない。

労働者の民衆教育の指導者たちの中に、新古典主義的教育理念を奉ずる人たちもいた。しかしながら、それによってかれらは支配階級の文化を最も価値ある文化として受け入れた。学習サークルは、古い支配階級から文化的伝統と教育的目標を採用した。その結果、労働者固有の文化、彼らの労働経験、生活様式の価値はおとしめられた。

この理由は、WEAの指導的な代表者たちが労働者の地位をいわば知的労働者と同じ地位におこうと努めてきたからである。工業労働者が、著名な作家の本を読んだり、オペラを鑑賞したり、博物館や美術の展覧会を訪問したりするような文化的活動や、かつては支配階級や中産階級の専有物であった諸活動を高く評価することを学ぶことも重要であるとみなされた。その目標は労働者が「高い」文化に到達することであった(Gustavsson, 1991; Ginner, 1988)。

Ginner(1988)によると、新古典主義的教育理念の基本的な考えは、以下のように要約できる。

- ・ 個人に焦点を当てる
- ・ 文明化への批判、技術に対する敵意さえ含まれるような、顕著な懐疑主義
- ・ 教育のもっとも重要な目標として個性の文化的形成。美的で道徳的な訓練はこの目的への手段であり、基準は支配階級の文化に一致して設定された。

工業的労働とその技術的前提条件は、教育のプロセスから排除された。このようにして、市民性教育と新古典主義的教育はどちらも工業的労働の代償的機能を割り当てられた。

自発的なものから国家への依存へ

学習サークルにおいて進行していた学習プロセスはやがて国によって支援されるようになった。労働運動はまた国民高等学校すなわち成人のための学校を設立した。そしてそれは次第により国家に依存し統制されるようになった(Johansson-Eriksson&Johansson, 1999)。禁酒運動も規律正しく、きちんとした行儀のよい労働者を育てることをめざす生涯学習プロセスにとって重要であった(Ambjörnsson, 1998)。ストックホルムの労働者大学において、自然科学や心理学などにおける新しい科学的な発見についての講義が研究者によってなされた(Frängsmyr, 1991)。国家は、たとえば禁酒問題などのさまざまな主題に関する講義をするために国中を旅行する研究者に支援を与えた(Johansson, 1987)。要するに、きわめて多くの生涯学習プロセスが展開した。

では、スウェーデンの労働者の生涯学習プロジェクトの結果は何であったのか。おそらく多くの目標が成し遂げられたが、このことにWEAの教育政策の結果がどの程度反映したかを判断することは困難である。いずれにせよ、労働者は1921年に投票権を獲得した。1930年代から1970年

代まで、スウェーデンは社会民主主義政党によって統治された。その結果、WEA はほとんど国家機構の一部となった。

第二次世界大戦後の最初の数十年間、スウェーデン経済は繁栄した。生活水準はすべての階級で上昇し、社会の発展の手段としての科学への信仰が労働者団体に一層堅固に定着するようになった。同時に労働者の教育理念の本質が変化した。初期の市民性教育は、人々の流動と活性化を目的とする、一種の底上げのプロセスであった。その究極の目的は社会を根本的に変革することにおかれた。しかし、社会民主主義政党が支配的政党であった事実は、民主主義のための闘争が勝利したという考え方を促進してきたかもしれない。労働者は受動的なメンバーとなり、一部の指導者によって政治的生活が代表されるようになった。それゆえ、もはや会議の運営のテクニックや言語を訓練する必要もなくなり、討論するスキルを訓練する必要もなくなった。1950年代と1960年代において生涯学習プロセスは社会や労働条件の根本的な変革ではなく、労働生活の合理化と存在する現実社会への適応を目的とした(Ginner, 1988)。

余暇時間は、単調な仕事への代償とみなされ、価値ある活動に使われなければならないと考えられた。この点において、新古典主義的理念は依然として支配的であった。労働者の良いセンスは商業主義への対抗的攻勢として教育されなければならないと考えられた。

GINNER(1988)は総合技術の理念 (poly-technical ideal) がWEAの政策に決して影響を与えなかったと結論づけた。この一つの理由として、労働者自身の経験は決して高く評価されていないこと、他の理由として、科学と技術への信頼が堅固であることをあげている。科学と技術は社会の積極的な発展に貢献するであろうと、それらは疑問に付されず、当然のこととみなされた。

今日、学習サークルによって担われている生涯学習プロセスはほとんどが集団的な政治的プロジェクトの一部である。しかしながら学習サークルはしばしば市民性教育の手段として使われる。たとえば、スウェーデンの国民がEUに加盟するか否かを国民投票で決定するとき、国家は多くの学習サークルに助成をした。そのようにして、人々はEUについて学び、加盟するかしないかによってどんな結果がもたらされるのかを学習する。こうして、今日ではその目的はEU市民を育てることであり、20世紀はじめのようなスウェーデン市民を育てることではなくなっている。

多くの学習サークルは、個性と創造性の発達にとってもまた重要である。人々は余暇時間に絵をかいたり、裁縫をしたり、陶芸などに従事したりする。文学の読書のような文化的活動はまた国中の学習サークルにおいて展開している。しかし、そのような学習サークルは労働運動により組織されているだけでなく、すべての政党によっても組織されている。私の結論は、現代のスウェーデンの労働者の生涯学習プロセスは、かなり集団的プロジェクトよりも個人的なものに変化したということである。

参考文献 (略)